

書

評

『労働者の自立』

『労働者の自立』編集委員会編 耕文社 定価1500円 209頁

矢野 秀喜 (千代田区労協常幹)



本書は、労働者の自主生産企業・パラマウント製靴共働社の代表＝石井光幸さんが自らの経験を交えて、労働者自主生産企業の成功の鍵は「雇われ者根性」を克服する「労働

者の自立」にあることを語ったものである。

パラマウント共働社は発足9年目。倒産争議解決後、自主生産企業として再出発し、年商約2億7千万、収支トントンの従業員18人の事業体として発展してきた。倒産（解散）攻撃一争議を経て自主生産を始めた企業は幾つかあったが、その中で9年間活動を継続している企業は稀である。継続は力、という。ではその源泉はどこにあるのか、直面している課題は何か、本書ではそれが率直に語られている。

パラマウント製靴共働社は、「足に優しい」をモットーに「消費者の足に合わせた靴づくり」を進めている。石井さんが目指すのは労働者が主人公の運動体である。「ふつうの会社はつからない」これは石井さんが絶対の曲げることのない原則なのである。パラマウント製靴共働社は労働者生産協同組合としてつくり、石井さんは「労働者生産協同組合の運動は、労働組合運動の一環として位置づけられなければならない」と言う。石井さんにとっては、「労働組合の本来の役割は社会的活動を通じての地域づくり、仕事おこしにある」のであり、パラマウントはその具体的な運動体なのである。そのためにパラマウント「自立・協同・愛」をテーマに掲げている。自立した労働者が力を合わせ、一人ひとりを大切に働き闘うことを意味しているのである。そこで言われる「労働者の自立」とは、「雇われ者根性」の克服、つ

まり他人任せの「甘え」意識を克服することである。

労働者の自主生産企業では、資本家がやってきた経営も含め労働者が全てを行わねばならない。賃金も自分たちで決める、賃上げをするためには何をしなければならないかを考え、実践することも求められるのである。

その共働社が、今年これまでにない困難事態に直面した。前営業部長のサボタージュにより製造、受注がかみ合わず、4月以降の仕事がなくなってしまったのである。石井さんは「雇われ者根性」がまた克服しきれないことに原因があると言う。だが、共働社に働く仲間は営業と製造で厳しい議論ができるようになった。会議では、他人まかせではなく、いつまでに何をするのか各自の責任を明確にする議論も行われるようになったという。「雇われ者根性」の残滓を一掃する取り組みが始まっているのである。

労働組合においても、倒産や解雇攻撃と闘うには、経営実態を把握し、経営の内容にまで積極的にかかわる力量が労働者に問われてくる。単なる物取り主義では資本には勝てない。幹部依存＝幹部請け負いでは闘いの展望は切り開きえない。一人ひとりの労働者が自立し、自分の頭で考え行動する力を獲得していくことが必要なのである。

現在の日本では、資本の海外移転によるリストラ合理化や総「臨時工」化攻撃によって、かつてない大量失業や不安定雇用がつくり出されている。これとどう対決していかは労働運動の重要な課題である。また、労働者が自ら職場をつくり出すという運動、石井さん・パラマウントの苦闘は、現在の資本の攻撃を打ち破っていく上で大きな意義を有する。

本書は、私たち労働組合運動、争議運動に関わる者に多くの示唆を与えてくれる。